午後5時30分。降っていた雨は上がり、客席は満員御礼。はじめに、主催者を代表して金田後援会長がこの度の上演に至るまでの経緯を説明し、「ぜひ最後まで楽しんでいってほしい」とあいさつ。続けて団員8人が優雅な舞踊を披露し、客席の熱をさらに高めてから芝居へと入りました。

この日の演目は「松竹梅三兄弟の五月の仇討（あだうち）」。出囃子とともに幕が上がると、客席からは「待ってました」と言わんばかりの拍手が沸き起こりました。

そして、演者たちはその期待に応えるように、一つひとつの動き、一言一言の台詞に感情を込めて芝居を熱演。時折、客席から投げかけられる声に笑いを交えて応えるなど、約2時間半たっぷりと観衆を魅了しました。

芝居は全12幕の序盤3幕、仇討に向かおうとする場面で終了。その後の物語については、現在のところ台本がないとのこと。しかし、児玉座長が最後に「次回は仇討するところをお見せしたい」とあいさつすると、場内は拍手喝采。観客からは「続きが気になる。ぜひまたこの場所で芝居をしてほしい」と次回の上演を強く願う声が聞かれました。

つなぐ人、つながる文化

「役者が足りない――」昨年度の広報しらたか12月号で、児玉座長が高玉芝居の現状について語りました。この地で200年以上も愛され、親しまれ続けてきた伝統文化。その灯が今、後継者の問題によって絶えてしまうことが危惧されています。そんな状況での今回の公演は、芝居再興への挑戦、生きる文化の新たな歴史の幕開けとなりました。

芝居を演じる人、支える人、楽しむ人、一人ひとりが文化を継承する小さな灯です。町の宝がこの先100年、200年と伝わっていくために、その歴史の道筋を皆さんで照らし、つないでいきましょう。